

大学生における自分探しに影響を及ぼす要因

鈴木 雅治¹ 中村 真理²

本研究では、大学生の自分探しに影響を与える要因について、中間（2008）の想定したプロセスを基に、検討を行うことを目的とし、大学生261名を対象として質問紙調査を実施した。その結果、自己違和感に関連する要因として、人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感が関連していることが明らかになった。さらに、自己違和感に影響する要因としては、人生に対する満足度・主観的幸福感・運命悲観が挙げられることが明らかになった。また、自己開拓意識に関連する要因として、人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感が関連していることが明らかになった。しかし、自己開拓意識に影響する要因としては、本研究で設定した要因から影響を受けないということが明らかとなった。以上の結果から、①日常において幸福度の低さから運命を悲観的に捉えてしまうと、自己違和感を感じ、それを改善しようという形で自分探しを行うようになる。②そして、自分探しを行っていく人が自己違和感を感じ、自己開拓意識を持つためには、自尊感情や本来感を高めることが必要である。③さらに、自己開拓を行うと、自尊感情や主観的幸福感、人生に対する満足度が高まっていく。④そして、自尊感情や主観的幸福感、人生に対する満足度が満たされることによって、自分探しの意識は低下する。⑤その安定した状態が揺らぐような出来事などに会うことによって、自己違和感が生じ、新たに自分探しを行うようになる。というプロセスが考えられた。

キーワード：自分探し、自己違和感、自己開拓意識、自尊感情、本来感

問題と目的

青年期とは、「自分とは何か」「自分は何のために生きているのか」「自分は何になりたいか」といったことを考え、アイデンティティを形成してゆく時期である。自分探しという言葉には、大人になることを先延ばしにする「モラトリアム人間」といった流行語に近いニュアンスがあるとされている（速水，2008）。しかし現在では、そのような否定的、あるいは青年を揶揄するようなイメージは薄い。また、「自分探し」と似たような言葉としては、就労に関して「やりたいこと探し」や「やりたいこと志向」がある。これも青年期において取り沙汰される言葉である。やりたいこと志向とは、好きなことや自分のやりたいことを仕事に結びつけて考える傾向のことである（安達，2004）。

また自己開拓意識とは、自らが自己を見出し、それを最適な方向へと形成していこうとする意識であり、実際に新たな自己を見出そうと様々なことを試みようとするものである（中間，2008）。

一方、伊藤・小玉（2005，2006）は、“sense of authenticity”に「本来感」という訳語を与え、本来感を「個人が自分らしくあると感じている全般的な感

覚」と定義している。

Gecas（1991）は、これまでの心理学と社会学における自己に関する諸理論を整理し、自尊感情や自己効力感とともに本来さの感覚（sense of authenticity）を挙げている。そして、“authenticity”に生きることがその個人の well-being の感覚を促進させると論じている。

Harter（2002）は、人間の健康的で適応的な側面に焦点を当てるポジティブ心理学において、人間性心理学の理論家が展開してきた論説を実証的に検討していこうという気運が高まっており、そうした流れの中においても“authenticity”は重要な概念として取り上げられていると述べている。

「自分探し」「本来感」という2つの概念では、どちらの概念に関しても自尊感情との関連が検討されており、それぞれに関連があることが明らかにされている（中間2008，伊藤・小玉2006）。

中間（2013）は、自尊感情と心理的健康との関連を恩恵享受的自己感との比較を通して再考している。恩恵享受的自己感とは自己の周りの環境や関係性に対する肯定的感情から付随的に経験されるであろう自己への肯定的感情と定義されている。

水間（2002）は、自尊感情とは個別の自己というものを対象化させた上で、その評価感情を問うものであるとしている。それに対し、中間（2013）は、恩恵享

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

受的自己感において対象化されるのは独立的存在としての自己ではなく、他ならぬ自己をとりまく他者や環境であり、それゆえそれらの肯定にはそこに埋め込まれた自己の肯定も含意されると考えている。なぜなら、その中心には、自己が存在しているからであると述べている。中間 (2013) の研究結果では、自尊感情を高く持つことができなくても恩恵享受的自己感を高く持つことで、幸福感が維持されるということが明らかにされた。

また、中間 (2008) は、自分探しに関して、以下のようなプロセスを想定できるのではないかとしている。

①日常における自尊感情の低さや幸福感の低さが、自己違和感という形で自分探しのきっかけをもたらす。②そこから、実際に何らかの自己開拓を行うことで徐々に幸福感や自尊感情が高まっていく。③さらに、自分探しを行う者の意識の中心が、自己違和感から自己開拓へと傾くと、もっと幸せになりたいという、目的にかなうような自分探しプロセスが展開されるようになる。④そして、幸福感や自尊感情が十分に満足されることによって、自分探しへの意識は低下する。⑤その安定した状態がゆらぐような出来事に出会うことによって、つまり、再び幸福感や自尊感情が低下させられることによって、自己への違和感が生じ、再び自分探しが始まる。

以上の中間 (2008) の想定したプロセスを基に、本研究では以下の点を検討することによって、自分探しプロセスを明確にすることを目的とした。

1. 自己違和感に関連する要因の検討
2. 自己違和感に影響を及ぼす要因の検討
3. 自己開拓意識に関連する要因の検討
4. 自己開拓意識に影響を及ぼす要因の検討

方 法

○調査対象者：関東圏内にある大学1年生から4年生の計261名 (男性110名, 女性151名, 平均19.9歳, SD = 1.81) を分析対象とした。

○調査方法：大学の講義時間中に無記名・個別記入形式の質問紙調査を実施した。

○質問紙の構成

1. フェイスシート (年齢・性別)
2. 自分探し尺度: 中間 (2008) の作成した「自己違和感」と「自己開拓意識」の2次元による自分探し尺度9項目を使用。
3. 本来感尺度: 伊藤・小玉 (2005) の個人が自分らしくあると感じている全般的な感覚を測定する尺度7項目を使用。
4. 自尊感情尺度: Rosenberg (1965) による Self-esteem Scale 10項目の日本語版 (桜井, 1997) を使用。
5. 恩恵享受的自己感尺度: 中間 (2013) の関係性や環境といった、自己が埋め込まれた周囲の状況を肯定する程度を測定する尺度7項目を使用。
6. 運命悲観: 林田・佐藤 (2009) の自己憐憫尺度より、運命に対する悲観因子の5項目を使用。
7. 主観的幸福感尺度: 伊藤・相良・池田・川浦 (2003) によって作成された、心理的健康を測定する簡便な尺度15項目を使用。
8. 人生に対する満足度尺度: 角野 (1994) によって作成された、“過去 - 現在 - 未来にわたる人生に対する主観的評価”と定義される人生に対する満足度の程度を測定する尺度5項目を使用。

結 果

1. 自己違和感に関連する要因

自己違和感に関連する要因を検討するために、相関分析及び分散分析を行った。尚、分散分析において、自己違和感を高群・低群に分けて一要因分析を行った。その結果を Table 1・Table 2に示す。自己違和感は、人生に対する満足度 ($r = -.505, p < .001$), 主観的幸福感 ($r = -.523, p < .001$), 運命悲観 ($r = .408, p < .001$)との間に中程度の相関が認められた。また、本来感 ($r = -.324, p < .001$), 自尊感情 ($r = -.327, p < .001$), 恩恵享受的自己感 ($r = -.306, p < .001$)との間に弱い相関が認められた。

自己違和感の高群と低群では、人生に対する満足度 ($F(1.259) = 51.16, p < .001$), 主観的幸福感 ($F(1.259) = 16.79, p < .001$), 本来感 ($F(1.259) = 16.79, p < .001$), 運命悲観 ($F(1.259) = 49.38, p < .001$),

Table 1 自己違和感とその他の要因との相関分析結果

| | 1 自己違和感 | 2 人生に対する 満足度 | 3 本来感 | 4 主観的幸福感 | 5 運命悲観 | 6 自尊感情 | 7 恩恵享受的 自己感 |
|-------------|------------|--------------------|----------|-------------|-----------|-----------|-------------------|
| 1 自己違和感 | — | — | — | — | — | — | — |
| 2 人生に対する満足度 | -.505** | — | — | — | — | — | — |
| 3 本来感 | -.324** | .448** | — | — | — | — | — |
| 4 主観的幸福感 | -.523** | .680** | .504** | — | — | — | — |
| 5 運命悲観 | .408** | -.411** | -.183** | -.437** | — | — | — |
| 6 自尊感情 | -.327** | .390** | .401** | .482** | -.362** | — | — |
| 7 恩恵享受的自己感 | -.306** | .449** | .362** | .542** | -.370** | .311** | — |

** $p < .001$

Table 2 自己違和感に関連する要因

| | 人生に対する満足度 | 主観的幸福感 | 本来感 | 運命悲観 | 自尊感情 | 恩恵享受的自己感 |
|----------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 自己違和感 高群 | 15.21(5.934) | 36.25(6.827) | 21.18(3.851) | 15.35(4.713) | 22.70(5.034) | 21.20(4.928) |
| 自己違和感 低群 | 20.26(5.361) | 42.39(5.094) | 23.08(3.315) | 11.28(4.608) | 25.82(4.661) | 23.80(3.564) |
| F 値 | F(1,259) = 51.16* | F(1,259) = 16.79* | F(1,259) = 16.79* | F(1,259) = 49.38* | F(1,259) = 26.58* | F(1,259) = 24.03* |

**p < .001

自尊感情 ($F(1,259) = 26.58, p < .001$), 恩恵享受的自己感 ($F(1,259) = 24.03, p < .001$) の得点に有意な差があることが示された。

2. 自己違和感に影響を及ぼす要因の検討

自己違和感に影響を及ぼす要因を検討するために、人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感を独立変数、自己違和感を従属変数とした。重回帰分析及びパス解析を行った。その結果を Table 3・Figure 1に示す。自己違和感へは、人生に対する満足度 ($\beta = -.228, p < .001$), 主観的幸福感 ($\beta = -.262, p < .001$), 運命悲観 ($\beta = .193, p < .001$) からの有意なパスが確認された。これら3つの独立変数の説明率は、 $R^2 = .347$ であった。その他の要因については、有意なパスは確認されなかった。この結果から自己違和感に対して、人生に対する満足度・主観的幸福感・運命悲観の3つが影響を与えていることが示された。

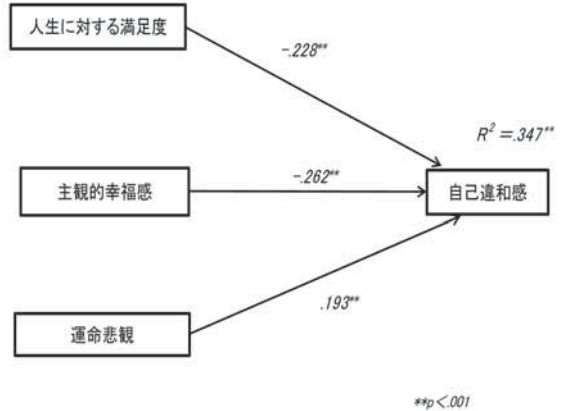


Figure 1 自己違和感パス解析結果図

開拓意識は、人生に対する満足度 ($r = .247, p < .001$), 本来感 ($r = .222, p < .001$), 主観的幸福感 ($r = .279, p < .001$), 自尊感情 ($r = .229, p < .001$) との間に弱い相関が認められた。しかし、運命悲観 ($r = -.185, p < .001$), 恩恵享受的自己感 ($r = .183, p < .001$) との間にほとんど相関は認められなかった。これらの結果から、自己開拓意識と人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・自尊感情との間には関連があるが、運命悲観・恩恵享受的自己感との間には関連がないということが示された。

自己開拓意識の高群と低群では、人生に対する満足度 ($F(1,259) = 8.575, p < .05$), 主観的幸福感 ($F(1,259) = 7.938, p < .001$), 本来感 ($F(1,259) = 7.061, p < .001$), 運命悲観 ($F(1,259) = 6.375, p < .001$), 自尊感情 ($F(1,259) = 5.571, p < .05$), 恩恵享受的自己感 ($F(1,259) = 3.250, p < .05$) の得点に有意な差があることが示された。

4. 自己開拓意識に影響を及ぼす要因の検討

Table 3 自己違和感の重回帰分析結果

| | B | β | 有意確率 | R ² 乗 |
|-----------|-------|---------|--------|------------------|
| 人生に対する満足度 | -.136 | -.228 | .002** | .347** |
| 本来感 | -.056 | -.056 | .365 | |
| 主観的幸福感 | -.143 | -.262 | .001** | |
| 運命悲観 | .141 | .193 | .001** | |
| 自尊感情 | -.024 | -.033 | .590 | |
| 恩恵享受的自己感 | .033 | .040 | .522 | |

**p < .001

3. 自己開拓意識に関連する要因の検討

自己開拓意識に関連する要因を検討するために、相関分析及び分散分析を行った。尚、分散分析において、自己開拓意識を高群・低群に分けて一要因分散分析を行った。その結果を Table 4・Table 5に示す。自己

Table 4 自己開拓意識とその他の要因との相関分析結果

| | 1 自己開拓意識 | 2 人生に対する満足度 | 3 本来感 | 4 主観的幸福感 | 5 運命悲観 | 6 自尊感情 | 7 恩恵享受的自己感 |
|-------------|-------------|----------------|----------|-------------|-----------|-----------|---------------|
| 1 自己開拓意識 | — | | | | | | |
| 2 人生に対する満足度 | .247** | — | | | | | |
| 3 本来感 | .222** | .448** | — | | | | |
| 4 主観的幸福感 | .279** | .680** | .504** | — | | | |
| 5 運命悲観 | -.185* | -.411** | -.183** | -.437** | — | | |
| 6 自尊感情 | .229** | .390** | .401** | .482** | -.362** | — | |
| 7 恩恵享受的自己感 | .183* | .449** | .362** | .542** | -.370** | .311** | — |

**p < .001 *p < .01

Table 5 自己開拓意識に関連する要因

| | 人生に対する 満足度 | 主観的幸福感 | 本来感 | 運命悲観 | 自尊感情 | 恩恵享受的 自己感 |
|-----------|-----------------|------------------|------------------|------------------|-----------------|-----------------|
| 自己開拓意識 高群 | 18.53(6.581) | 40.12(7.112) | 22.58(3.856) | 12.77(5.053) | 24.80(5.374) | 22.85(4.706) |
| 自己開拓意識 低群 | 16.30(5.507) | 37.76(6.234) | 21.36(3.463) | 14.35(5.001) | 23.32(4.650) | 21.83(4.291) |
| F 値 | F(1,259)=8.575* | F(1,259)=7.938** | F(1,259)=7.061** | F(1,259)=6.375** | F(1,259)=5.571* | F(1,259)=3.250* |

* $p < .05$ ** $p < .001$

Table 6 自己開拓意識の重回帰分析結果

| | B | β | 有意確率 | R ² 乗 |
|-----------|-------|---------|------|------------------|
| 人生に対する満足度 | .031 | .068 | .421 | .101 |
| 本来感 | .062 | .082 | .225 | |
| 主観的幸福感 | .049 | .119 | .203 | |
| 運命悲観 | -.030 | -.054 | .441 | |
| 自尊感情 | .049 | .089 | .210 | |
| 恩恵享受的自己感 | .007 | .011 | .879 | |

** $p < .001$

自己開拓意識に影響を及ぼす要因を検討するために、人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感を独立変数、自己開拓意識を従属変数とした、重回帰分析及びパス解析を行った。その結果を Table 6 に示す。自己開拓意識へは、人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感のどの要因からも有意なパスは確認されなかった。この結果から、自己開拓意識は、どの要因からも影響を受けないということが示された。

考 察

本研究では、中間（2008）の想定したプロセスを基に、自分探しに影響を及ぼす要因を検討した。

1. 自己違和感に関連する要因

はじめに、自己違和感に関連する要因について、相関分析を行った結果、自己違和感と人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感との間に相関が認められ、関連があることが示された。また、自己違和感得点の高群・低群で一要因分散分析を行った結果、2群の間で人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感それぞれの得点に有意な差があることが認められた。これらの結果から、自己違和感は、人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感と関連性があり、今の自分についての不満や現実の自分とのズレを感じると、満足度、自分らしさ、幸福感、自己に対する評価、周囲の環境や関係性に対する肯定的感情が低くなり、逆に、肯定的感情が高くなると今の自分についての不満や現実の自分とのズレを感じなくなることが示された。また、運命悲観が低くなると自己違和感も低くなり、運命悲観が高くなると自己違和感も高く

なるということが示された。このことから、今の自分についての不満や現実の自分とのズレを感じると、運命を悲観的に捉えてしまい、今の自分についての不満や現実の自分とのズレを感じないと、運命を悲観的に捉えないことが示された。中間（2008）の研究では、自己違和感と自尊感情・主観的幸福感との関係を見ており、自己違和感と自尊感情・幸福感との間に関連があることが示されていた。本研究の結果においても、自己違和感と自尊感情・幸福感との間に関連があることが示された。したがって、自己違和感は自尊感情・幸福感と関連があることが明らかとなった。

2. 自己違和感に影響を及ぼす要因

自己違和感に影響を及ぼす要因について、重回帰分析及びパス解析を行った結果、自己違和感は、人生に対する満足度・主観的幸福感・運命悲観から有意なパスが認められ、その他の要因においては、有意なパスは認められなかった。この結果から、自己違和感には、人生に対する満足度・主観的幸福感・運命悲観が影響を与えていると考えられた。さらに、自己違和感を説明するにはこれらの3つの要因で説明可能であることがわかった。以上のことから、今の自分についての不満や現実の自分とのズレを感じてしまう背景には、満足度が低下し、幸福感が感じられず、運命を悲観的に捉えてしまうような状態があるということが明らかになった。

3. 自己開拓意識に関連する要因

自己開拓意識に関連する要因について、相関分析及び分散分析を行った結果、自己開拓意識と人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・自尊感情との間に相関が認められた。そして、運命悲観・恩恵享受的自己感との間には相関が認められなかった。一方、自己開拓意識得点の高群・低群で一要因分散分析を行った結果、2群の間で人生に対する満足度・本来感・主観

的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感それぞれの得点に有意な差があることが認められた。これらの結果から、自己開拓意識は、人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・自尊感情と関連があることが示された。運命悲観・恩恵享受的自己感との間には有意な相関は認められなかったが、自己開拓意識得点の高群と低群の間には有意な得点差があるということが示された。したがって、自らが自己を見出し、それを最適な方向へと形成していく意識と関連している要因としては、満足度、自分らしさ、幸福感、自己に対する評価と考えられた。さらに、自らが自己を見出し、それを最適な方向へと形成していく意識を高く持つと、満足度、自分らしさ、幸福感、自己に対する評価、周囲の環境や関係性に対する肯定的感情も高くなり、運命を悲観的に捉えなくなるということが考えられた。中間(2008)の研究では、自己開拓意識と自尊感情・主観的幸福感との関係を見ており、自己開拓意識と自尊感情・主観的幸福感との間に関連性がないことが示されていた。これは、中間(2008)の研究では、調査対象者が大学3年生を対象にしている点と男女比による違いであると考えられた。本研究では、大学1・2年生が調査対象者として多かったこと、男女比も中間(2008)の研究では、女性の対象者が多かったが、本研究ではほぼ同数であったためと考えられた。このため、本研究では中間(2008)の研究結果と違った結果が得られた。そして、自己開拓意識には、人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・自尊感情との間に関連があることが明らかとなった。

4. 自己開拓意識に影響を及ぼす要因

自己開拓意識に影響を及ぼす要因について、重回帰分析及びパス解析を行った結果、各要因からの有意なパスは認められなかった。この結果から、自己開拓意識は本研究で設定した要因から影響を受けないということが示された。したがって、自らが自己を見出し、それを最適な方向へと形成していく意識に影響を与えているものは、今回検討した要因の中にはないということが明らかになった。

総合考察

本研究では、大学生における自分探しに影響を及ぼす要因について、中間(2008)の想定したプロセスを基に、検討を行った。その結果、本研究では、自己違和感に関連する要因として、人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感が関連していることが明らかになった。また、自己違和感に影響を及ぼす要因として、人生に対する満足度・主観的幸福感・運命悲観が影響を与えていることが明らかになった。さらに、自己開拓意識に関連する要因として、人生に対する満足度・本来感・主観的幸福感・運命悲観・自尊感情・恩恵享受的自己感が

関連していることが明らかになった。しかし、自己開拓意識に影響を及ぼす要因としては、本研究で設定した要因から影響を受けないということが明らかとなった。以上のことを踏まえ、本研究では以下のプロセスを想定した。①日常において幸福感の低さから運命を悲観的に捉えてしまうと、自己違和感を感じ、自己違和感を改善しようという形で自分探しを行うようになる。②そして、自分探しを行っていく人が自己違和感を感じ、自己開拓意識を持つためには、自尊感情や本来感を高めることが必要である。③さらに、自己開拓を行うと、自尊感情や主観的幸福感、人生に対する満足度が高まっていく。④そして、自尊感情や主観的幸福感、人生に対する満足度が満たされることによって、自分探しの意識は低下する。⑤その安定した状態が揺らぐような出来事などに会うことによって、自己違和感が生じ、新たに自分探しを行うようになる。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、大学生における自分探しに影響を及ぼす要因について、中間(2008)の想定したプロセスを基に、検討を行った。本研究の限界と今後の課題として考えられることは以下の2点である。

第1に、本研究では、自分探しのプロセスとして中間(2008)が想定したプロセスに沿う形で検討を行う予定であった。しかし、今回検討した要因により、プロセスをモデル化することが出来なかった。それは、本研究で検討した要因以外の要因が関連あるいは影響していると考えられたからである。そのため、今後、そのような他の要因について検討し、プロセスの再構築を行うことが必要である。

第2に、本研究では大学1年生から大学4年生までを調査対象としているが、学年差の検討、男女別のプロセスのモデル化や男女差の検討等をしていないため、今後そのような点についても検討していくことが必要である。さらに、本研究の結果から、自尊感情と恩恵享受的自己感が自己違和感や自己開拓意識に影響していないという結果になったが、その点について詳しく検討していくことも今後の課題であると考えられた。

引用・参考文献

- 安達智子(2004). 大学生のキャリア選択—その心理的背景と支援— 日本労働研究雑誌, 46, 27-37.
- Gecas, V. (1991). The self-concept as a basis for a theory of motivation. In J. A. Howard & P. Callero (Eds), *The self-society dynamic*. Cambridge, England: Cambridge University Press. Pp. 717-187
- Harter, S. (2002). Authenticity. In C. R. Snyder & L. J. Shane (Eds), *Handbook of positive psychology*. London: Cambridge University

- Press. Pp.366-381.
- 林田太郎・佐藤 純 (2009). 青年期における自己憐憫の構造—自己憐憫尺度作成の試み. 日本パーソナリティ心理学会, 18, 1-11.
- 速水健朗 (2008). 自分探しが止まらない. ソフトバンク新書.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が Well-being に及ぼす影響の検討. 日本教育心理学会, 53, 74-85.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006). 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討—本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して—. 日本教育心理学会, 54, 222-232.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 日本心理学会心理学研究, 74 (3), 276-281.
- 角野善司 (1994). 人格3015 人生に対する満足尺度日本版作成の試み. 日本教育心理学会総会発表論文集, 36, 192.
- 水間玲子 (2002). 理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について—. 青年心理学研究, 14, 21-39.
- 中間玲子 (2008). “自分探し”の類型化の試みとそれぞれの特徴について—“自己違和感”と“自己開拓意識”の枠組みからの検討—. 福島大学研究年報, 4, 7-16.
- 中間玲子 (2013). 自尊感情と心理的健康との関連再考—「恩恵教授の自己感」の概念提起—. 日本教育心理学会, 61, 374-386.
- 太田洋介・石野陽子 (2011) 大学生における自分探し—自己理解の高低および学年差からの検討—. 島根大学教育学部紀要, 45, 63-69.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. 筑波大学発達臨床心理学研究, 12, 65-71.

—2015. 1. 28受稿、2015. 3. 7受理—